

盲ろうの門川さんと盲導犬の挑戦

①

お好み書き読者で、2009年にウガンダで開かれた盲ろう世界大会リポートを本紙(09年12月号)に寄せてくれた門川紳一郎さん(51) 〓 視聴覚二重障害者福祉センターすまいる理事長 〓 がこの春、盲導犬使用者(ユーザー)になった。門川さんが訓練を受けた公益財団法人日本盲導犬協会の話だと、全盲ろうの盲導犬ユーザーは現在、国内では門川さんだけだという。白杖や盲導犬を使って歩行する盲人は、踏みしめる足の感触から顔に感じる風や熱まで、全身で周囲の状況を把握しながら歩く。その中でも、耳から入る情報が遮断された盲ろう者の単独歩行は、非常に難しいと考えられてきた。その困難なチャレンジを成し遂げ、晴れて盲導犬ユーザーになった門川さんに、取得に至る経緯と盲導犬歩行の可能性について、犬との共同訓練中のメモなどを交えて、ご寄稿いただいた。(編集部、写真は門田耕作撮影)

楽しく、風を切って自由に歩く!

門川 紳一郎

「自由に歩きたい」。そう強く思う力が弱く、小学校2年生のころからようになったのは、40代に入ってから点字を使うようになった。そこからだっただろうか。私は元々視て、歩行時は白杖を使って単独で

歩いていた。

ところが、私の目は視神経萎縮のため

徐々に視野、

視力が下がり

始め、気がつ

いた時には、

ほとんど自由

に歩くことが

難しい状態に

なっていた。

しかも、20

10年の大阪

駅大改築工事

の後は、普段よく利用していた大阪

駅がまったく利用できなくなつてしまつた。歩きたいルートを歩けなくなつてしまうと、私の歩行の行動範囲の低下に伴つてそれまでできていたことがだんだん難しくなつてしまつた。たとえば、暇を見つけては家の裏の土手をジョギングしていたことができなくなつたり、プール通いもできなくなつたり。

また、当時、東京で開かれていた会議等に参加のため、月に2回から3回のペースで上京しなければならず、その度大変苦労したものだつた。大阪駅を利用できないために、遠回りをして地下鉄の新大阪駅へ向かったり、時にはタクシーの配車を頼んだりしたこともある。遠回りすると時間もかかるし、タクシーを利用した

駅改築、行動範囲狭まる

このままでは行動範囲が狭くなつていくばかりではなく、運動不足にも陥つてしまう。元のように自由に歩いたり、走つたりしたい! その思いは日増しに強くなつていった。

犬に指示発話、自信なく

私が盲導犬を初めて見たのは、



盲導犬を使用したい希望を日本盲導犬協会に伝えてから約3年、ようやく盲導犬との共同訓練が始まった= 2016年2月、横浜市港北区の同協会神奈川訓練センター

20代のころ、全米盲ろう者大会に参加したときだった。そこには盲導犬を伴った盲ろう者が参加していた。特に、イギリスから盲導犬ユーザーの盲ろう者が多数参加していたことは印象深かった。

しかし、当時の私は盲導犬にはまったく興味がなかった。なぜならば、まだ自由に歩きまわるだけの保有視覚が残っていたし、それよりも、盲導犬には言葉で指示を伝えなければならぬと思っていたからだ。私は4歳のころに失聴しているため、発話が明瞭ではない。犬に正しく指示を出せる自信がなかった。

しかし後になって、アメリカで知り合った友人のバピンが盲導犬ユーザーと知り、大変驚かされる。彼は生まれつきの全ろうで、発声ができない。しかも、彼は光も影も見えない。完全なる全盲ろうである。

「盲ろう導犬」の有効性

私は自分自身は盲導犬は必要ないと思っていた一方で、盲ろう者にとっての盲導犬の有効性について関心があり、自分なりに考えていたことがあった。「盲導犬をさ

■「盲ろう者と介助犬」(抜粋)

コミュニケーションのハンディに加え、私たち盲ろう者が普段抱えている悩みは外出時の歩行、特に単独での移動が思うようにできないということ。周囲の様子を見ることができず、車の音も聞こえないため、家から一歩外へ出ると、危険と隣り合わせの状態なのです。ですから、盲ろう者の中には外出を諦めて家に閉じこもってしまう、体力を落としてしまう人たちも数多くいます。

盲ろう者の外出時の移動や公共の交通機関の利用の問題を考える時、まず手引きなどのガイドヘルパーの派遣があります。しかし、盲ろう者向けのガイドヘルパーはまだ少なく、しかもいつでもヘルパーを依頼することができるとはかぎりません。ガイドヘルパーなしでも盲ろう者の移動を保障する

らに訓練して、盲ろう導犬をつくってみることはできないのだろうか」といったことだ。

偶然にも2002年11月に大阪で開催された国際アシスタントドッグフォーラムにパネラーとし

にはどうすればよいのだろうか。

アメリカ、イギリス、オーストラリアなどの諸外国では、補助犬を連れ、盲ろう者をよく見かけます。しかし、日本ではまだ数人しかいないようです。その主な理由は、日本では「犬に命令や指示を出すには音声で合図が必要で、発声ができない盲ろう者には向いていない」という大きな誤解に起因しているようです。

今回、初めて聴導犬に出会い、犬の働きぶりに改めて感心させられました。盲導犬は視覚障害者のガイドを助ける目の代わりとなつて働いてく

れます。それに対して、聴導犬は耳の代わりとなつて聴覚障害者の情報例えば、物を落とした時や水を出しっぱなしにしていた時、来客などを知らせてくれます。どちらの犬もたいした働き者です。

特に聴導犬は、一人暮らしの盲ろう者にはその存在価値は大きいように感じました。犬がきちんと働いて

くれれば、火災や事故を未然に防ぐことができるだろうし、また、家族の一員として心のコミュニケーションがとれ孤独感を和らげることもできるのではないかと、いろいろ考えさせられたフォーラムでした。そして、盲導犬としての仕事と聴導犬としての仕事の両方をこなすことのできる、いわば盲聴導犬(こんな名称、なじまないな)を育成してもらえたら、ぼくたち盲ろう者には利用価値があつていいんじゃないかなとも思いました。

平成14年(2002年)10月に身体障害者補助犬法が施行された一現在、補助犬が盲ろう者にとつて6どこまで役立つものか、安全面での問題はどうか、今後討議を深めていかなければなりません。そして、盲ろう者に対して、補助犬に関する正しい知識を身に付けてもらうことも課題のひとつとなるでしょう。

右に抜粋して再掲したい。

チャレンジ強く訴え続け

個人差はあるが、視神経萎縮による視野、視力の低下が進むにつれ、何

とか自由に歩く方法はないものか、真剣に考えるようになった。

そんな時にまず思い出したのがアメリカで知り合ったバピンのことだった。彼は全盲ろうにもかかわらず、盲導犬を使ってどこへでも行く。彼の勇気ある行動には打たれ、学ぶことが多い。そんなバピンを日本に2度招聘している。特に昨年2015年11月の一般向け講演会では盲



門川さんが米国で知り合った全盲ろうの盲導犬ユーザーバピンさん（こちら向き右から2人目）と盲導犬（左下）。彼に刺激を受けて、門川さんも盲導犬ユーザーになる決意をする。15年11月、大阪市内であった講演会

導犬同伴で来日、全盲ろう者の盲導犬歩行への関心が高まるきっかけとなったのではないだろうか。

ところが、残念なことに日本では盲ろう者が盲導犬を持つことにはまだ消極的で、特に私のようにまったく聞こえない盲ろう者の盲導犬使用者は全国に例がない。

そのような事情を知らながら、それでもあきらめることができない私は、アシスタンスドッグ支援協会等を通じて、盲ろう者への盲導犬歩行の実現に向けて取り組んでほしいことを要望してきた。

そんな時に、私が一緒に活動している仲間が盲導犬ユーザーになったという話を聞いた。この人は弱視で難聴で、私とは障害の程度が全く違うが、彼からのアドバイスもあり、日本盲導犬協会（日盲）に相談をもちかけたのだった。2013年の真夏のころだったと記憶している。

日盲には私が盲導犬歩行にチャレンジしてみたいことを強く訴え続け、神奈川訓練センターでの1泊体験歩行にも参加させてもらった。1泊体験歩行では夜間歩行も体験できた。体験歩行では訓練士が後ろをついて歩きながら犬を管理していたが、体

験を続けていく中で私の盲導犬歩行へのチャレンジ精神がますます強くなっていったと思う。

通訳・介助者、人材不足

盲ろう者の移動やコミュニケーションを支援するための行政の制度として、通訳・介助者派遣制度が全国で実施されている。白杖での単独歩行がむずかしいのであれば、通訳・介助者を利用すればよいではないかという声が聞こえてきそうだ。しかし、

通訳・介助者派遣制度があっても、支援者となる人材が限られている。また、通訳・介助者の活動時間も、基本は9時から17時となっている。つまり、盲ろう者が本来利用したい時に利用できないことになる。通訳・介助者が来てくれるのを家でじっと待っていないなければならないなんて、白杖で自由に単独歩行をしていた身にとっては、まるで拘置所に入れられたような気分になせられる。

そこで考えてみたのが、盲導犬歩行へのチャレンジだった。犬を傍においていれば、ちよつと近所へ外出したい時、早朝の散歩など、気がねなくできる。日盲の神奈川訓練セン



全盲ろうの盲導犬ユーザー・バピンさんを米から招いた門川さん＝同

ターでの1泊体験歩行から間もなく、私は盲導犬との共同訓練を希望する旨の申請書を提出、再三の体験歩行や面接を経て、申請を受理していただくことができた。

盲導犬の訓練施設は全国に11カ所ある。その内、近畿は3カ所（大阪、兵庫、京都）。また、日盲は横浜の神奈川訓練センターのほか三つの訓練センターを持っている（仙台、静岡、島根）。地元の大阪など、近畿での訓練ではなく、遠く神奈川の横浜になったのは、近畿などほとんどの訓練センターで、全く聞こえないユーザーを指導した前例がないために、受け入れに消極的だったと思う。そんな時に、相談をもちかけた神奈川訓練センターが親身に相談に乗ってくれ、最終的には訓練の希望を受理してもらった。申請受理からおよそ2年、今年の2月8日から共同訓練が始まることになった。（つづく）